C.P.I.Mates
The Committee for Promotion to Innovate Japanese People by Educational and Cultural Contact, since 1979
ストゥーティ ありがとう
2018. 12
No.18
認定 NPO 法人 C.P.I 教育文化交流推進委員会
発行所：C.P.I.スリランカ事務所
Mahindarama Road,Etul-Kotte,Kotte,SriLanka
日本本部；東京都三鷹市中原 2-16-9　Tel;0422-49-3808
E-mail：cpimate@gmail.com
URL:　http://www.cpi-mate.gr.jp

ホームページ　http://www.cpi-mate.gr.jp　URL English　http://cpimate.com

特　集

お父さん、お母さん ありがとう！

卒業里子からのメッセージ

生徒たちの成長を夢見ています　V. サンダマリさん　p-1
後輩に伝えたい教育支援の尊さ　M. A. S. D. シルバ君　p-2
測量士になる夢が叶えそうです　G. L. T. クマラ君　p-3
Aレベル教室で教師をしています　K. D. D. マジュランガニさん　p-4
自分たちの力で後輩を支援したい　ラハール・ラナシンハ君　p-5
日本語の教師をしています　J. K. ラナウィラさん　p-7
里子との交流ツアー　報告書　牟田慎一郎　p-9～12
スリランカ　行ってみたい　知ってみたい
スリランカ国のシンハラ民族の『友達観』　日下大器・淑子　p-13

卒業した教育里子からの寄稿文(1)

T.M.P.V.Sandamali

センター:　Nikapota　No. 5151

職　業　:　教師

生徒たちの成長を夢見ています

日本のお父さん、お母さんへ

大変ご無沙汰してしまいましたがお手紙できて嬉しいです。皆さまおかわりないことと思います。私も元気です。最近の私の状況をお知らせします。私は2015年スリランカのArt学士課程の大学を卒業しました。それから職探しをしました。そして公立の学校の副校長の職を見つけました。私はついに私が望んでいた職を見つけることができました。教育現場で働くこと以上に重要な仕事があるでしょうか。人間社会において、かって発明されたもっとも強力な武器は教育です。教育の力で世界をよりよく出来るのです。

子どもたちに夢を与えたい

私の今の職場はB/Bandarawela Central collageです。そこはスリランカのUva州にある重要な学校の一つです。現在約4000人の生徒が学んでいます。私の仕事の中で彼らと過ごす時間が一番好きです。彼らが良き指導を受ければきっと将来、彼らは良き指導者、医者、ビジネスマン、教師、技術者などになるでしょう。最終的に彼らは世の中に役立つ人間になるでしょう。そんな人間を育てることが私の唯一の目標です。いつかある日、そんな成功を修めた彼らに会うことが私の望みです。

奨学金をいただいていたころ

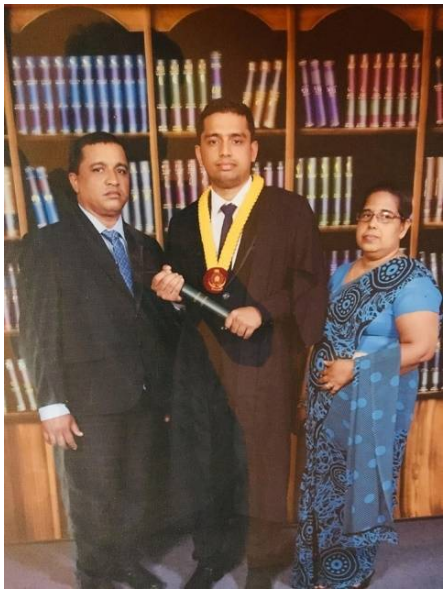
私は子供のころ家が貧しくて教育支援を受けていた頃をまだ覚えています。しかし、あの頃は毎日が楽しかったです。何よりもこの国で最も美しい地方に住んでいたのですから。私は愛する父母や二人の兄たちと生活を共にしていました。そして彼らは私の夢の実現に向けて沢山の手助けをしてくれました。私が8学年だった時です。私の家は貧しくて毎日の食事も十分ではなく毎日が大変でした。

その時、私の人生で大きな変換点がきました。それは私が日本のC. P. I. 奨学支援を受けられることに決まったからです。日本からの支援がなくては、私は長年の教育や大学の勉強は出来なかったことでしょう。私は私の教育を長年見守り援助して下さった日本の両親に感謝します。私の現在のキャリアはあなたの親切な支援のおかげです。尊敬と感謝の念を送ります。いつの日かお目にかかれたら嬉しいです。

私は日本の奨学支援を受けている、あるいはこれから受ける若い奨学生にメッセージを送ります。この奨学金を受けることは、あなたの人生にとってとても貴重なチャンスになります。それを有効に活用して、あなたの夢を実現させて下さい。それが、あなたが出来る日本の両親への唯一の恩返しです。

日本の両親様たちへ。皆さんお元気で長生きしてください。どうかお幸せでありますように。

卒業した教育里子からの寄稿文(2)



M. A. Sanjeewa De Silva

センター： Negombo.　5702

職　業　：会社員

後輩に伝えたい教育支援の尊さ

私は3人兄弟の長男です。弟たちは学校へ通っています。私の父は役所の職員で母は主婦です。私はスリランカのNegomboで仕事に就き、家族と一緒に暮らしています。

私は日本の教育支援を受けたのは9学年の時でした。私の学業とスポーツの成績で校長とセンターのお坊さんの推薦を受けたからです。

それは私の勉強と希望を叶える大変良い機会でした。実際、日本の教育支援は教材費の援助や、さらに私が望んだ高度な教育を受ける助けともなりました。当時、家族は生活に困窮していましたから。日本の教育支援は私のより高い教育を受ける重要な援助となりました。おかげで私はスリランカの優秀な大学で高度な工学技術の学問を修めることができました。私は夢を叶えてくれた日本の両親に心から感謝しています。

教育支援を受けている後輩たちに伝えたい

私があなたたちのように教育支援を受けたのはまだほんの数年前のことです。私には沢山の夢や希望がありました。この教育支援を受けて考え方は変わりました。もはや私は私の両親に本や教材費を買うために両親にお金をお願いしなくてよくなりました。日本の教育支援はそのような教材費の全てを援助してくれます。

これは教育を受ける者にとっては最高の環境を与えてくれます。この教育支援を受けるあなた方には才能と幸運が待っています。決してそれを無駄にしてはなりません。最大限援助を活用してあなたやあなたたちの家族のために有効に使って下さい。

あなたは今、貧しくひもじい思いをしているかもしれません。しかし、この奨学資金を教育に有効活用したらあなたの未来は明るく幸せに満ちた誇らしいものになるでしょう。そうなるよう私は祈っています。

そして、このことを私の後輩たちに機会があるたびに伝えるでしょう。

里親さんにお礼とお願いしたいこと

私はあなたが優しい心をもって世界の人々が幸福になるように奉仕していることをよく理解しています。もし、いつかあなたに会う機会があったら私は今、どんなに感謝しているか、お伝えしたいと思います。私は小さい時からの夢を実現できてとても今、幸せな日々を送っています。あなたの支援して下さったお金はなくなってしまいましたが、それは素晴らしい私の人生を作ってくれました。あなたの人生も幸福に満ち溢れんことを祈っています。さらに今後も子供たちの援助を続けて下されば嬉しいです。どうぞ一度スリランカを訪れて下さい。とても美しいスリランカの国をご案内します。そして一緒に楽しい時間が過ごせたら嬉しいです。　いつか日本を訪問して、あなたに会う機会があるかもしれません。どうか今後もご連絡下さい。お元気で。

卒業した教育里子からの寄稿文（3）

G.L.T.Kumara

センター：　Mapalagama　No. 5982

職　業　：　大学生

測量士になる夢が叶えそうです

【病に負けそうな家庭でした】

日本の里親さん　こんにちは。私は、Nagoda という小さな村で生まれました。それはスリランカの南ゴールの近くにあります。

そこには、スリランカでも最も有名で魅力的なジン河があって、私の家の前を流れています。

私の家族は 6 人です。兄弟は 4 人で私は 3 番目の子どもです。私の父は石工でした。今は体の不調のため仕事に行きません。母も近頃、白血病が原因の足の難病で苦しんでいます。

姉は結婚し二人の娘を授かりました。私の兄は病気がちで家族の重荷でした。そして我々は面倒を見ました。私の弟は　コロンボ大学で高等教育を始めたばかりです。

【測量士になることを夢見ています】

私は私の村の学校から初等教育を得て、ナゴダ王室学校に入学することが出来ました。そしてスリランカでも有名なリッチモンド大学の系列ので中等学校で学ぶチャンスを得ました。私はエンジニアを目指し、Aレベルを数学に重点を置いていました。

私は、測量科学を学ぶためスリランカのサバラガムワ大学に入ることができました。今、この学位と測量士資格を取ることに、私は熱意を燃やしています。なぜならそれが私の大きな目標だからです。今、私は大学で最終的な年の学生です。

従って、今の私は学術調査と実技試験で、とても忙しくしています。

私は、スリランカで水路学の学位を持った測量士の 6 人のうちの人になろうとしています。

それは私の人生における最大の目標です。

【日本に行くチャンスが来ました】

学校では、私は勉強だけでなく特別な活動として学校の風紀委員と放送委員もしていました。

また、私は、有名な伝統的なキャンディアンダンサーでもありました。それによって 2015 年に SNECC の日本公演ツアー　に参加して、あなたの国で　私の踊りを披露することができました。

それは私の人生におけるとても貴重な経験でした。本当に、それは私の夢がかなった大きな出来事でした。しかも、その時、私の日本のお母さんに会うことができたのです。信じられないことが私に沢山起きました。

【C. P. I. の奨学生になったことが転機でした】

私が9学年であった時に、私は、村の寺院の名高いお坊さんから、この大きな奨学金プログラムに選ばれたことを伝えられました。彼は私をSNECCのゴールセンター長のお坊さんに紹介されました。

そしてそのお坊さんは私の学校の成績や家庭の経済事情をインタビューして、新しい奨学生として私を選んで下さったのです。

それ以来、私は大学生活の終わりまでこの機会を持つことができてとても幸せでした。あなたの奨学金が如何に私の学業を助け、成功に役だったかを

≪ ☞ P-4　下段に続く≫

卒業した教育里子からの寄稿文（4）

K.D. Dilani　Maurangani

センター：　Kotte　No. 3945

職　業　：　教師

A レベル教室で教師をしています

私は家族の中で兄と弟の間で長女です。私の父は配管工であり、母は主婦です。

父母は私の学業のために大きな役割を果たしました。

私は 1 学年から 13 学年まで Sri Rahula Balika Maha Vidyalaya で勉強しました。

私は、数学と会計学が、学校で学んだ他の学科より一番好きでした。私は授業時間の間に女の学生指導や風紀委員などをしていました。

私は、A/L 試験の成績の結果、一番希望していたコロンボ大学の経営学部に入学することが出来ました。

私の最も進みたかった希望は、会計士になることでした。

それのために、私は大学の研究学科に加えて公認された会計学を勉強しました。その結果、卒業後、私は会計事務所の数社で働きました。

それから、私は政府系の学校の A/L コースの経済学先生として勤めることになり、現在も働いています。

さて、事業場で得た理論的な知識と実務経験は、私の教師としての義務を果たすのに大きな助けとなりました。

思い返せば、私は日本の C.P.I. 奨学生に選ばれましたのは 9 学年の時でした。学校の試験の成績が良かったことで校長先生の推薦がありました。それは私の学生生活に対する大変良いサポートでした。私の家庭は貧しかったので C.P.I.から支援を受けたことにより、家族全体が助かったのです。何よりも家族に負担を掛けないで学校に行けたことが嬉しいのです。

これからも私と同じような境遇の後輩のために、この活動を続けてください。彼らは私と同じように、あなたに感謝しつつ、学業に努めています。そして、いずれは国のためになる社会人として成長することでしょう。彼らも皆さんの期待を裏切らないだろうと思います。

≪P-3 から≫

私は心から言いたいです。本当に今の自分があるのは、C．P．I．の奨学金のお陰です。私は、今、私の成功のために、色々と助けてくださった名誉あるチャンダシリお坊さんや他のお坊さん、C.P.I.の小西会長、日本の里親さん、そして、SNECCの多くのスタッフの方々を思い出しております。

奨学金を支援していただき、大学生活の終わりまで、しっかりと勉強し、成功者として卒業することが日本の里親さんとその他の方々に対する私の感謝と尊敬であると思います。

最後に、私は、あなたの援助の手をスリランカの困難な世界を生き残ろうとする学生たちに与えてくださることに心から感謝したいです。そして、あなたが、 私たちの後輩のために、これからも、このプログラム を続けてくださることを望みます 。

あなたにお釈迦様のご加護がありますようにお祈り致します。

どうもありがとうございました。　敬具

卒業した教育里子からの寄稿文(5)

Rahal Ranasinghe

センター:　Rathnapura　No. 5749

職　業　:　IT企業勤務

自分たちの力で後輩を支援したい

私は宝石で有名な町、Rathnapura で生まれ育ちました。私は3人兄弟の末っ子です。母は主婦、父は私たちを育てたり教育を受けさせるために、小さな宝石商を営んだり様々な仕事をしてきました。
この奨学生になった当時は我が家は経済的には中クラスでした。私の姉はまだ学生で私たち10代が欲しい物を与える経済的余裕は両親にはありませんでした。夢を叶えるために教育を受け、何マイルも歩いて英語クラスに通うためのお金は我が家にはありません。私と姉は自分たちの置かれている厳しい環境を知りました。
我々は貧しいことに何の不満もありません。私の父は常に一生懸命に勉強して良い成績を取るように我々を励ましてくれます。貧しいと希望も小さくなります。私の望みは勉強でいい成績を上げることです。私はこどもの頃から学校では優秀で期末試験では常に3番以内の成績でした。奨学生になって初めて受け取った新しい本や文房具は今まで買うことが出来なかっただけに嬉しかったです。この本や文具のセットは最も価値あるものだと思っています。

自分を支えた支援プログラム

毎月支給されるテキストの他に、お金は本やペンなどに費やします。これらを支給して下さる皆さんに感謝いたします。学校生活を送るには十分な支給物でした。

私は日本の奨学金プログラムに感謝いたします。私がさらに上級クラスを目指して試験を受ける時に私の経済的な援助をしてくれた叔母の一人が言っていました。「教育を受けるとよりスムースに良き人間になれます。さもないと荒々しく恐ろしい人生になる」と。

私はもし奨学資金を受けられなかったらどんなことが起こっていたか、どんなことが犠牲になっていたか考えることがあります。多分私は今のような素晴らしい場所にはいなくて、生きていくために何か馬鹿げた仕事に就いていることでしょう。
私は勉強は好きでしたが、特に数学が好きでした。10年生の時に私がした決断はITの勉強でした。そしてトップクラスで試験をパスしました。
しかし、一度試験に失敗したことがあります。再度挑戦してパスして国立大学の受験資格を得ました。その時まで私はこの資格のことを知りませんでした。私は既にWebの開発会社で働いていましたから。私はただちにコロンボ大学の情報技術の学士講座を目指して勉強を開始しました。
私が3年以内に目標を達することができ、私の人生をより良きものにして下さったのは、すべて私を支えてくれた日本の両親のおかげです。

支えになる里親からの手紙

奨学生だった時に私たちを援助して下さる方たちに定期的にお手紙を書きました。私は援助者がどんな方たちか知りませんでしたが沢山お手紙を出しました。仲間たちの里親はスリランカを訪ねたり、手紙を送ってくれました。私たちは常に皆さんからのお返事を待っています。
私は里親さんからお返事をいただいておりませんが、皆さんは愛と情熱に溢れた偉大な心の持ち主で、貧しい子供たちの未来を支え、りっぱな人間になるようにサポートして下さっていることを知っています。

本当に心からお礼を申し上げます。奨学生の一人として今はこのお返しを社会にしなくてはと考えております。継続的な援助が里親さんたちの満足感をもたらすことでしょうが、もし時間があったらどうぞ子供たちにお返事を下さい。それは彼らにとって大変大きな勉学の励みになります。

私たちの力で教育支援活動をやります

このプログラムは奨学金を必要とする沢山の子供たちの中から選ばれます。そうして選ばれた彼らはより高度な教育を受けることでしょう。私の周りには奨学金が必要な友人が沢山います。私がこの制度を活用できたのはとても幸運でした。私たちは仲間たちと一緒に友情を育み、より良い毎日を過ごしていきたいと思っています。

今、私は援助を必要としている貧しい子供たちを支援する立場にいます。これは政府からの援助ではなくて社会や教育ある人々、成功した人々によって支援しなければいけないと思います。

私は子供たちを援助する機会を持てて大変幸せです。私にとってこのことは長年に渡って援助して下さった方々に対する感謝の気持ちを表す一つの方法です。

私たちが出来るこの小さな寄付では十分ではありませんが、将来この機会を得られる多くの子供たちのために努力したいと思っています。

今、自分が皆さんから与えられた貴重な支援の経験から、奨学生になったばかりの生徒やこれから奨学生になりたいと思っている子供たちにアドバイスしたいと思います。

後輩に伝えたい感謝の心

あなたが常に大家族で貧しい暮らしであっても、一番大事なことは教育を受けることに対する強い願望です。その願望があれば里親さんに良いお返しができ、さらにあなたの人生がより良きものになることでしょう。今、あなたは正しい道に立ちました。これからはこの幸運を生かしてあなたの夢を実現させて下さい。

結局、あなたが何になるかは問題ではありません。最も大事なのは、今、あなたが何をするかです。常に正しい道を歩んで下さい。あなたの足元をみることを決して忘れないでください。あなたの家族のこと、周りの人々のことを忘れないでください。このチャンスを得られなかった子供たちのことを忘れないでください。この機会を得たことに常に感謝の心を忘れないでください。

更なる進歩こそ援助者への恩返し

現在、私はスリランカのNawalaにあるWeb会社にソフトウエアー技術者として働いています。私はその仕事を楽しんでいます。休みの日は友人や家族と楽しい時を過ごしています。

私は自分が得た教育に十分満足しておりますが、教育的見地から鑑み、将来、私は修士の学位を取ろうと思っています。そのためにも、今こそ勉強をしなくてはいけないと考えております。

私は自分を援助して下さった方たち全員に心からの気持ちを現わしたいと思います。この支援制度が有効でなければ私はこのような手紙を書くことはなかったでしょう。私はこの制度に従事している人々に声援を送りたいです。そしてこの制度を必要としている子供たちを助けて欲しいです。あなたの援助は大変子供たちにとって価値あるものなのです。

あなたはかって援助したことを失望することはないでしょう。なぜなら奨学生たちは輝かしい資格を身に着け成功した人生を送っています。あなたの援助は将来に渡って、世界がより良き場所になることに役立つことでしょう。もう一度感謝の気持ちをお伝えします。私を奨学生にして下さってありがとうございます。

Family

卒業した教育里子からの寄稿文(6)

Jayarukshi Kanchana Ranaweera

センター:　Nikapota　No. 2739

職　業　:　教　師

女性の先生たち

日本語の教師をしています

私は独身で両親と一緒に住んでいます。母は主婦で、父は今病気で家にいます。母は家でジャムを作って小さな商売をしています。弟は一人います。彼はカメラマンです。私は生まれたときから 2016 年まで貸家で住んでいました。経済的に非常に困難な環境で中学校に通っていました。

C.P.I.の奨学生に推薦されました

ある日、担当の先生が私を呼んで、「あなたはこの申込書を家で書いて持ってきてください」と日本奨学金への申込書をくださいました。そのとき私は 8 年生でした。申込書を記入して校長先生のサインもいただきまして、日本センターに提出しました。それで 2001 年から 2010 年までずっと日本の CPI 里親様から奨学金をいただきました。この奨学金のおかげで私はスムーズに勉強を続けることができました。

O レベル試験に合格してから、A レベル試験のために商業学系の科目を選択しました。それは新しい経験でした。経済学、商業学、会計学の勉強の他に個人授業も受けました。私は一生懸命勉強しました。私は学校の生徒委員も務めていました。学業と同時にクラブ活動もしました。学校生活はとても楽しかったです。毎週の日曜日は日曜学校に通いました。日曜学校が終わってから日本語のクラスにも参加しました。日本語能力試験 4 級に合格しました。それから日本語にもっと関心を持ち、日本語の学習に力を入れました。

日本語を教える先生になりました

学生時代、私の夢は看護婦になることでした。私は 「アーシリ」と言う病院の看護婦の面接にも行きました。しかし選ばれませんでした。それで私の夢を叶えることができませんでした。とても残念でした。私は 2006 年にコロンボ・ロイヤルカレッジに就職することになり、2016 年まで日本語を教えていました。今 ヨシダ・インターナショナル・スクールで日本語の教師をしています。中学校と高校の学生に日本語を教えています。日本の里親様のおかげで、私はここまで来ることができました。私は一生懸命頑張って熱心に教えます。はじめは大変でしたが今は大丈夫です。教えながらいろいろなことを勉強しています。日本へ行って教師研修を受け、そこで習った「教え方」を使いながら教えています。また、土日にスリランカ日本教育文化センターで日本語を教えています。2012 年－2013 年に国立教育研修所で教師研修も受けました。

日本の里親さんに感謝します

日本の里親様は長年にわたり、一度もお会いしたことのない私の教育支援をしてくださいました。里親さんのおかげでスリランカの子ども達に少しでも役立つ人になることができました。日本の里親様やお世話になりました皆様のことを一生忘れません。私を応援してくださいました日本の里親様に心から感謝しています。里親様のご健康とご多幸をお祈りしています。

学生たちの成長を見るのは一番の幸せです

私は貯金して土地を買いました。それはわたしの一つの夢でした。私は両親の世話もしながら仕事や勉強を頑張っています。私は家族の皆と楽しく過ごしています。次の目的は新しい家を建てることです。今私は経済的に困難な学生に無料で日本語を教えたりサポートをしたりしています。その学生たちの成長を見るのは一番の幸せです。学生は試験に合格したことを聞くとまるで私が試験に合格したみたいでとても嬉しいです。私はこのような人生ができたのは日本センターの事務局長チャンダシリ様をはじめ会員、先生方と日本の里親さんのおかげだからです。そして学校の先生や私の両親のご努力がなかったら私は今日教師になれなかったと思います。皆様に心からお礼を申し上げます。どうもありがとうございました。

スリランカ

２０１８里子交流ツアー報告

報告者　牟田慎一郎

当初 8 月の予定で募集したが集まらず、締め切りを延期して再募集。結局、10 月 22 日から 29 日までのスケジュールで、東京から森下夫妻と福岡から私たち夫婦の計 4 名の参加で、実施しました。森下夫妻が高齢のため最後のスリランカツアーになるかもしれないということで、里子の家を訪問することに主眼をおいてスケジュールを組みました。ただ、私の妻は、初めてのスリランカだったので、前半に観光もすることにしました。

10 月 22 日にそれぞれ日本を出発。東京組が、17:10 コロンボ着、福岡組が 19:00 着となり、スリランカ日本教育文化センター（SNECC）で落ち合いました。空港で両替をしましたが、￥10,000 が Rp14,673 で、昨年の Rp13,800 から Rp が 6%ダウンしていました。

翌 10 月 23 日 SNECC を出発し、ピンナワラの象の孤児院を見学。スリランカはすでに雨期に入っており前日の雨で川が濁っているということで、70 頭のうち 10 数頭の象だけが水浴びに出てきました。それでも迫力ある象の行進が見れました。

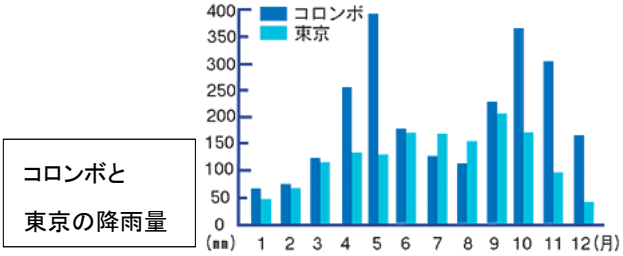
いつも食事をしていたピンナワラのレストランは

工事中だったので、一般のレストランで昼食をとり、午後 3 時過ぎにダンブッラにつき、一番近いゲートから石窟寺院に入り内部を見学しました。

石窟寺前にて

その夜は、カンダラマ湖畔にある Amaya Lake Hotel に宿泊しました。コテージ形式の自然の中に佇む私の大好きなホテルです。

スリランカは、10 月 11 月が雨期で、湖の水も満々と水を湛え、木々も一部水につかって素敵な風景を見ることができました。雨期といっても短時間にシャワーの如く雨が降った後、からっと晴れるという天候であり、違った景色が見れるので、雨期に行くのもいいものだと思いました。



コロンボと東京の降雨量

翌 24 日は、午前中に、シギリヤロックを観光しました。頂上の水浴場は、満々と水を湛え、頂上からの 360 度の景色は最高でした。

昼食は、一般の人々が利用するレストランで摂りましたが、カレービュッフェが Rp160、飲み物が Rp.100（合わせて約￥170）と格安でした。

シギリヤロック頂上からの眺望

午後は、第 2 の王朝があったポロンナルワ遺跡（1017 年から 1255 年）を観光しました。当時の繁栄が目に浮かびます。

25 日は、ハーブガーデンに立ち寄った後、最後の王朝があったキャンディの仏歯寺を見学しました。

仏歯寺にて

その後、キャンディを後にし、標高 1800mのヌワラエリアへ向かった。途中 Blue Field という紅茶工場を見学し紅茶をごちそうになった。ヌワラエリヤでは、マーケットを散策し、豆カレー用の豆やヤシの木から摂れる砂糖を買ったり、各々買い物を楽しみました。峠を過ぎて、しばらく行ったところの Amaya Langdale Hotel に宿泊しました。

イギリスの植民地時代の建物だろうか、瀟洒でこじんまりしたホテルは、アットホームで落ち着ける素敵なホテルでした。

26 日は、森下さんの 2 人の里子の家を訪問しました。最初に訪問した Talawekere に住む Lalith Kumara さんの家は、狭い坂道を降りて行ったところにあり、狭いながらもまずまずの佇まいで、家の中もまあまあきれいにしていました。

午後に訪問した Deeraniyagala に住む Sudath Nandalochana さんは、森下さんの最初の里子で、いまにも雨漏りしそうな、ほんとうに粗末な家に住んでいました。彼は、生活費を確保するために、自宅の一角に建物を建てシイタケ栽培をしていました。

この日は、ゴールの Koggala Beach Hotel に泊まりました。

27 日は、大航海時代にポルトガルやオランダによって築かれた要塞や旧市街があるゴールを観光しました。

その後、Kohaduwa のセンターで、私の里子 Sampath Chatufranga 君に会いました。手作りの

船をプレゼントしてくれました。彼の家は、車で行けないようなところにあるそうで、自宅訪問は、断念しました。

この後、森下さんの里子３人に会う予定でしたが、一人が川の増水のため会うことができず、あとの２人 Walallavita の Lahiru Madushanka さんと Ittapana の Ashan Isuranga さんに会うことができました。

Ittapana では、運よく Katina Perahera Buddha Festival が行われていました。

スリランカ最終日の 28 日は、SNECC で、森下さんの里子 1 人と私たちの里子 3 人に会うことができました。

里子たちは、それぞれ、弁護士になりたいとか、航空工学を学びたいとか夢を語ってくれ、将来が楽しみです。

今回は、たくさんの里子の家を訪問することができて、思い出に残る旅となりました。

皆は、午後、買い物をした後、夜の便でそれぞれ日本へ帰国しましたが、私は、引き続き 6 人の家を泊まりながら９日間延泊し、スリランカを楽しみました。

10 月 30 日から友達の知り合いのお坊さんと一緒に、ヌワラエリヤの東の山腹、標高 1200mのところにある瞑想所(別荘)へ行きました。その途中、3500 年ほど前からお坊さんたちが瞑想のしているお寺を訪問。瞑想している姿を見せてくれました。

帰りに、お坊さんのおばあちゃん宅に立ち寄りましたが、94 歳になるおばあちゃんが、孫であるお坊さんにひざまづいて挨拶する姿には感動を覚えました。

また、スリランカの原住民が暮らす地域にも立ち寄り、暮らしぶりを見学しました。

スリランカの原住民

11 月 3 日は、京都産業大学の学生たちを交えて日本祭りをするというので、一日 SNECC で過ごしました。日本語の書き取りテストや習字の体験などがあり、100 名を超える青年たちが参加していました

お昼には、日本の学生たちが焼き飯と焼きそばを作ってスリランカの青年たちに振舞いました。またゲームをしたりして交流を深めていました。

この日は、ちょうど SNECC のあるお寺の Katina Perahera Buddha Festival が行われ、たくさんの子供たちが行列に参加し、日本からの学生たちも一緒にコッテの街中を行進して回りました。

新しいともだちが増え、新しい経験をし、何度行っても興味の尽きない、素晴らしいスリランカの旅となりました。

スリランカ国のシンハラ民族の
『友達観』

日下　大器・淑子

見たい、知りたい！スリランカ

インド亜大陸の南東に水滴の形をした島がある。その島はスリランカ国である。スリランカ国は仏教を信じるシンハラ民族が７割、ヒンドゥー教を信じるタミル民族が２割、イスラム教を信じるムーア人が１割からなる多民族国家である。

第二次世界大戦の戦勝国によって日本が分割統治される案が大戦後のサンフランシスコ対日講和会議で出た。その時、セイロン国（現在はスリランカ国）の代表であるジャヤワルダナさんが『日本は我々の友達である。日本は日本として立派に存在していてほしい。仏教の教えの中に「憎しみは憎しみで消えない。愛によってのみ消える」とある。だから分割統治なんてとんでもない。私は反対である。私の考えは同じ仏教を信じる諸国の人も賛同してくれると信じる』との演説をして下さった。そのお蔭で日本はドイツや朝鮮のように分割統治されることにはならなかった。このことで我々日本人はスリランカ国の人々の「友達」への接し方を知った。

真の友情とはなにか？

さて、1978 年そのシンハラ人の中から１人の留学生が京都の大学に来て、京都で下宿した。彼は留学生とは言え、すでに立派な僧侶であったので多くの日本人と広く、親しく交わった。その結果、彼いや彼の国、スリランカへの理解を深めて、支援しようとする日本人が出てきた。その人達は支援団体を作った。彼はその団体と提携する団体をスリランカ側に作った。両団体で各種の交流が企画され、実行された。それに伴い人的交流が盛んとなり、私たち夫婦との個人的な交流も深まるようになった。

彼との数十年の友人関係を思いつつ、スリランカ人の「友情感」について、思うところを述べてみたい。

ケース（1）

関東地方にアジアの若者に農業を教えている学院があった。この学院で学んでいたスリランカからの研修生 2 人が関西で研修を受けるために来阪し、私の家に宿泊したことがあった。２日目の朝のことだった。2 人のうちの 1 人がなかなか起きてこないので、どうしたのかとたずねると、「疲れて少し熱があるようなので今日はここで休んでいたい。」という。それで、私は元気な方の人に先に朝食をとってもらい、授業に遅れるといけないからすぐに出かけるようにと言うと、彼は「私も今日は休みます。」と言うのです。「どうしてですか。あなたは元気なんだから、お友達をここに残して、あなた 1 人で授業を受けて来られたらどうですか」と私が言ったところ、彼は「気分が悪くて寝ている人と私は「友達」です。友達と私、2 人でこの家に泊まっていて私だけが出かけると、私達は「友達」でなくなります。ですから、私も一緒にいます。」と言うのです。それで私は「どうしてそんなことを言うのですか。あなたは出かけて今日の授業を受けて、その授業内容を休んでいる人に教えてあげるのが「友達」ではないのですか？休んでいる人は私が看ててあげますから。」と普通の日本人的考えを述べた。

このような問答が繰り返されたが、結局彼は自分を犠牲にして、困っている友達に添ったわけです。

ケース（2）

日本の文部省から奨学金を貰って、日本の大学で博士になったシンハラ人がいた。聞くと日本の２つの大学で勉強して学位をとったとのことで私は彼を尊敬した。私はスリランカを愛するし、彼は殊の外、日本を愛するので共に気が合い「友達」になった。彼は真面目な性格であったのでスリランカ国を代表する地位に就くことが出来た。彼はスリランカに人脈を持っているから何でも出来ると初対面の時に言っていた。一方、私はスリランカに興味があったので、いろいろ調べることがあった。ある時、どうしてもスリランカ国で調べてもらいたいことが出て来たので、「これだけの資料を用意することが出来た。さらにはあなたの人脈で調べてもらいたい。」と頼んだ。彼は「その資料はいただいておく。私はスリランカ国についてなら多くの人に聞いて何でも調べられる。」と云って引き受けてくれた。ところがその後、何の返答も帰って来ない。それで、催促したら「あなた直接調べなさい。」との返答だけだった。さらに不可思議なことに私が用意した資料を返す素振りも見せなかった。彼は口先だけ良く言ったが実際は何もしていなかった。
この返答には実に面食らった。

ケース（3）

シンハラ人の友達が面白い話をみつけた。小学校に行きだした息子に読んで聞かせるのにちょうど良いと言って、子供向けの話を２編、見せてくれた。

その１:「ともだち」

とても仲の良い蟻の夫婦が居ました。ある日、ちょっと寒いのでかまどの傍に居ました。妻の蟻が誤ってかまどに落ちて焼け死んでしまいました。残った蟻の夫は泣いて暮らしていました。窓辺に友達の鳩が来て理由を聞きました。妻が死んだと伝えると「あなたが悲しんでいるのだから私もこの奇麗な羽根を抜いて悲しみます。」と言いました。鳩はボーの木に飛んで行きました。ボーの木は鳩に羽根がない理由を聞きました。「友達の蟻の妻が死んだからだ」と答えました。ボーの木は「それは悲しい事だ。私もこの美しい葉っぱを落して悲しみます。」と言いました。立派な象がボーの葉を食べに来ました。葉っぱがないので象が尋ねると、「私の友達の鳩の友達の蟻が悲しんでいるので私も葉っぱを落として悲しんでいる。」言いました。象は「それは悲しい事だ。私の大きい牙を折ってしまおう。」と言って、川に水浴びに行きました。川が「象さんなぜ牙が折れているのですか？」と尋ねると象は「友達のボーの木の友達の鳩の友達の蟻に不幸があったからだ」と答えました。川は「それはかなしいことだ。私もこの清らかな水を汚くして悲しみます。」と言いました。しばらくすると百姓が来て、「川よ、なぜ水が汚いのか？」と尋ねました。川は「私の友達の象の友達のボーの木の友達の鳩の友達の蟻に不幸があったからだ。」と言いました。すると百姓は「私の川が悲しんでいるのなら私は足を切ろう。俺達の友達の不幸を想うとこれぐらいでは済まないと思うけど」と言って足を切りました。お昼の時間になったので百姓の奥さんが来ました。彼女が「朝は元気だったのにどうして怪我をしているのか？」と尋ねました。百姓は「川の友達の象の友達のボーの木の友達の鳩の友達の蟻に不幸があった。それは悲しい事だから私も悲しむのだ。」と答えました。それを聞いた奥さんはそれでは「私のこの長い髪の毛を切って私も悲しもう。」と言って、髪を切ってしまいました。彼らが家に帰ると娘が「どうして髪を切ったのか」と尋ねました。奥さんは「百姓の友達の川の友達の象の友達のボーの木の友達の鳩の友達の蟻に不幸があったので私も不幸になり悲しんでいるのだ。」と答えた。すると娘は毎日、料理に使っている壺を持ち出して、「私も不幸になる。」と力を込めて地面にたたきつけました。すると壺はこなごなに壊れて、飛び散りました。そのかけらが悲しんでいる蟻の夫に当たり、その場で蟻はぺちゃんこになり「蟻の夫」は死んでしまいました。

蟻の夫は生きていた時の善行で妻が生まれ変わっていたところにうまく生まれ変わることが出来たそうです。そこで蟻の夫婦はその後、幸せに暮らしたそうです。そのことを皆が耳にしました。それでこの国には悲しみの原因がなくなりました。それで友達たちの不幸はなくなり、皆は元通りになったとさ。

その2:「親友」

詩が大好きなスリランカの王様が居ました。立派な詩が出来たので同じく詩を愛するインドの王様に贈りました。インドにも詩を愛する人がいました。その人はインドの王様の計らいでスリランカから贈られてきた詩に接して、とても感激したのでスリランカにやって来ました。詩が大好きなスリランカの王様に会って、2 人は宮廷で夜遅くまで詩の話をしたり、一緒に散歩したりする「友達」になりました。王様は美しい女「友達」が管理する別荘を持っていました。ある時、王様は別荘に来て、寝室の壁に王様が作った詩の書き出しの 2 行だけを書きました。そしてこの詩を完成させた人にほうびをあげると書き加えました。実は王様はインドから来たあの詩人である「友達」が数日後にここに泊まることを知っていたのです。数日後、本当にその友達が来て、寝室の壁の詩を見て、その詩を完成させました。別荘の女友達は完成した詩を見て、ほうびが貰えると思い、インドの詩人を殺して遺体を隠して、王様のところへ行き、「私が完成させました。」と言いました。王様はそのことを信じず、問い詰めました。友達であるインドの詩人の遺体が別荘の中で発見されました。ただちに、王様級のお葬式が執り行われました。遺体が載る薪に王様は火をつけました。そして火が燃え上がり友達が炎に包まれると王様はその炎に身を投げて友達の上に覆いかぶさりました。こうして 2 人は焼け死んでしまいましたとさ。

この 2 つの話にはシンハラ人が子供に教える「友達」の姿が出て来ている。　シンハラの人達は、私達日本人以上に「友達」という言葉を口にするようだ。単に顔見知りであるとか、一度言葉を交わしたことがあるだけとか、友達の友達であるとかであっても「私の友達」と言って私に紹介します。また友達から多少の無理を言われても、「友達だから仕方がないさ」とか「友達だから当たり前よ」と言って、無理を聞く場合がある。それで大学を卒業しているシンハラ人にいったいシンハラ人は「友達」というものをどのように理解しているのかと聞いてみた。スリランカ国の仏教徒であるシンハラ民族は、友達を良い友達と悪い友達に分け、さらにそれぞれを以下のように 4 種類に分けることがあるとのことだった。

良い友達

（1）双方の利益のための友達
（2）同情してやさしくする友達
（3）頼まれればいつでもなんでも引き受ける友達
（4）困難、恐怖、苦痛、悲哀などを慰めたり、同じ状態になって困難を分かち合おうとする友達

悪い友達

（5）自分の利益だけを考えている友達
（6）悪に誘う友達
（7）口先だけうまく言うが実はなにもしてくれない友達
（8）面前では良く言うが蔭で悪口を言う友達

これを聞いていて、実にうまくまとめてあるなと思った。試しに、このまとめに従って上述の「友達」を分類してみよう。

日本を分割統治する案に反対したジャワルダナさんは「自分の死後、片方の目は日本の人に、もう一方の目はスリランカの人に寄付する。死んでも両国を見守る」と言っていた。そしてそれは実行された。それ程、日本を大切な「友達」であると思ってくださった方である。その日本が無くなることは許されないとの思いでの演説であったに違いない。つまり双方の利益のための友達関係（1）にあったことが分かる。

我が家に宿泊した研修生は友達の病気のために自分の利益を無視して友達に同情してやさしくする友達（2）だと言える。

自分の友達の頼みごとをなんでも引き受けてる（3）の人もいる。

子供に聞かせる話は 2 例とも友達の不幸や不当な扱いを慰めるため「友達」の不幸と同じ状態になった。これは困難、恐怖、苦痛、悲哀などを慰さめたり、同じ状態になって友達と分かち合う友達（4）に当てはまる。
別荘の女友達は「友達」であるが明らかに自分の利益だけを考える友達（5）である。

スリランカ国を代表する地位に就いた友達はいざという時に、結局何もしてくれなかった。口先だけうまく言うが実はなにもしてくれない友達（7）にぴったりの友達だ。

子供向けの話では現実の世界には良い友達や悪い友達がいるよと子供達に教えている。同時にその考えを次世代に伝えていこうとしている。又、私が経験したシンハラ人の行動もこの分類の中の友達関係に見ることが出来る。このような「友達」観がシンハラ人の中に脈々と流れているようだ。それは他の人々には不思議がられるが、その人達には当たり前だから何も問題ないとされるものである。このようなものを持ち続けている人々の集団を民族と言うのかしら？
すると我々の大和民族にもこのような他民族に理解されない何かを持っているのだろうか？

つまりその民族の人々は気付いていないが他の民族、我々は不思議なことがあるものだと気付いている。その逆で我々の民族では別に何も問題がない。だからわれわれの誰も何も気付かないが他の民族の人々は気付いて我々を不思議がっているという事が起こっているはずだ。

このように気付くことに温度差があるという事はどうやら事実で、このような事実があるということを互いに認め合うのが国際交流の成果なのだろうか？

参考文献
1.日下大器・淑子編「ともだち」
くさか基金発刊 1997.